

書評 BOOK REVIEW

村澤和多里・村澤真保呂〔著〕

異界の歩き方

——ガタリ・中井久夫・当事者研究

A5判並製・医学書院

2024年9月刊

定価2,200円（税込）



評者＝江口重幸（精神医学研究所附属 東京武蔵野病院）

少し昔の話だが、愛読書である白川静の『常用字解』を読んで動揺したことがあった。それは、私たちが頻回に使用する「道」という漢字の解説である。「道」には、首を手を持って行くという意味があり、他の土族のいる土地に入るときには、その土族の霊や邪霊が災いをもたらすので、異族の人の首を手を持って、その呪力で邪霊を祓い清めて進んだということから、「道」の文字には「首」が入っているというのだ。あるいは白川『字通』の「邊（辺）」の字も同じく、外部からの侵入を防ぐべく境界（辺地）に晒された異族の死体置場（髑髏棚）を示すものであるという。民俗学という「鹿島様」をはじめとする道祖神、あの世とこの世をつなぐ能の「橋掛り」も同様なものであろう。境界や越境とは、古来より人間にとってきわめて重大な空間であり出来事だったのである。

本書『異界の歩き方』は、精神病的な世界を異界にみたて、そこに分け入り、さらには往来可能なものにしようとする、きわめて大胆かつ不敵な試みである。なぜ異界の歩き方が必要なのか。じつは、それが統合失調症を中心とする精神病的状態の発現と治癒を考えるうえで不可欠のものだからである。その際に携行する3種の呪具が、べてるの家の「当事者研究」であり、中井久夫の「寛解過程論」であり、Félix Guattariの「スキゾ分析」なのだ。それがそのまま本書の副題になっている。

全体は11章からなり、序章「異界に分け入る」と、終章「すぐそばにある異界」にはさまれた9章が、各々3章ずつまとめられ、「Ⅰ. 異界」「Ⅱ. 自然治癒過程」「Ⅲ. 精神のエコロジー」という3部構成になっている。それぞれのセクションのさいごにはコラムが付い

ていて、「向谷地生良とべてるの家」「中井久夫の『寛解過程論』」「ラトゥールとガタリ」という、この2人の著者のコラボなくしては踏みこめない魅力あふれるまとめになっている。加えて、反精神医学とエコロジー（しかもSDGsや炭素負債におさまらない、自己を生態系の一部としてとらえるディープ・エコロジーなるもの）、さらには中世哲学に遡る「実体」と「存在」をめぐる議論が展開される。

ここで紹介される「誤作動」や「運転技術」、「オリゾラン」型の思考や「精神の免疫学」、そして「制度的精神療法」や「動的編成」は、21世紀初頭の精神医療領域を横断し、その光景を変容させる最強の思考といえるかもしれない。しかもそれらは、耳目を驚かすようなものではなく、一見目立たず、場合によっては日常的な風景にも溶け込むものでもある。終章「すぐそばにある異界」（ヘテロトピア）とはそうした事実を示している。

統合失調症や精神病的状態は、今日、病者個人に内在する、さらにはその脳にのみ存在するモノのように扱われがちである。本書をたどると、まったくそうではなく、相互行為的で、周囲との環境を含んだ、さらには自然を巻き込んだ「全生態系（生命圏）」とも結びついたものが想定されている。こうした視点を頭の片隅に据えておくだけでも、病むことや、治癒すること、さらには日常臨床をめぐるもうひとつ別の文脈が見えてくるのではないか。その時、異界へ往還する通路のありかもゆっくりと浮かび上がってくる。精神疾患への人間科学側からの入門書として最良の本書をぜひお勧めしたい。